

## 「奥の細道」むすび

池田 隆

令和四年十月十九日の夕刻、われわれ翁三人は「奥の細道」むすびの地、大垣へ到着した。江戸深川を出立したのは六年半前の平成二十八年五月十六日である。矢立初めの句「行く春や鳥啼き魚の目は泪」の前文に出てくる「前途三千里のおもひ胸にふさがりて…」に共感し、行き先は冥途になるかも知れないと思ったことを思い出す。すでにS翁は九十四歳、M兄が八十五歳、小生八十四歳である。

千住・日光・黒羽・白河・松島・平泉・山寺などを経て象潟までの往路は、数日ずつに区切りながら三年をかけて延べ四十五日で完歩した。ところが思わぬコロナ禍で三年間の中断を余儀なくされる。その間の体力低下は如何ともしがたい。鶴岡より出雲崎・金沢・敦賀を経て大垣までの復路一千キロはレンタカーに頼る。

とは言え、運転免許証を持っているのは小生のみ。六十年の安全運転歴を誇り、今も田舎で車を欠かさない日々だ。しかし年による体力と注意力の低下は否めない。人身事故でも起こしたら取り返しがつかない。高齢者運転に対する社会や周囲の目も厳しい。

復路の旅は三泊四日と二泊三日の二回に分けたが、雨にもしばしば祟られ、神経をすり減らす七日間だった。それでも芭蕉が辿った旧道沿いをのんびりと走り、往時を偲びながら気の合う三人で語り合うドライブは格別である。コロナ禍のお陰で全国旅行割が使え、豪華な温泉宿に泊まれ、美味しい日本海魚料理も頂けた。

最終日には那谷寺や東尋坊をゆっくり見物し、永平寺から大垣までは高速道路を走り、日暮れ近くに大垣市街の高橋に着く。芭蕉は出迎えに集まった大勢の門人と此処で別れ、舟で伊勢へ向ったとのこと。今は堀端に立派な芭蕉と曾良の像が立っている。

我々三人は互いに手を取り合って最後の記念撮影、通りがかりのご婦人が快くシャッターを押してくれる。無事のむすびに周囲の全てが声を上げ、涙を浮かべ喜んでるように思えた。

行く秋や鳥啼き魚の目は泪

めでたし、めでたし !!

